６年半ぶりに仕事に復帰して

函館市医師会
函館協会病院
河野　文子

６年半の子育て主婦生活から仕事に復帰し、１年半が経ちました。私は第二子出産の際に、産休を取らずに仕事を離れました。一人目の出産後、初めての育児と仕事の生活は、想像していた以上に大変で、同じ勤務医の夫は帰宅も遅く、お互いの両親は遠方であったため、二人の育児をしつつ仕事と家のことをしていくのは難しいと考え、退職しました。

子育て中心の毎日は、幼稚園の役員をしたり、母親サークルの活動をしたりと充実していましたが、下の子が年長になるころ、「私はこのままの生活を続けていいのか？」と思い始めました。仕事を辞めてはじめのうちは、書類などの職業欄に「医師（育休中)」と書いていましたが、４年、５年と経つうちに、仕事をしていないのに「医師」と書くことに、なんとなく後ろめたい気持ちがしていたのです。年齢も40歳となり、「今、仕事に戻らなければ、もうその機会は来ないかもしれない」とも思いました。

夫婦で話し合い、下の子が小学校に上がるタイミングで私は子どもたちと地元に戻り、両親に子育てを手伝ってもらいながら仕事を始め、夫はそのまま残ることになりました。ありがたいことに今の病院にご縁をいただき、令和の幕開けとともに新生活が始まりました。

復帰してはじめのうちは、白衣を着るだけで動悸がし、看護師さんに「先生」と呼ばれるたびにビクビク挙動不審になっていました。薬一つにしても、後発品が増え、名前を聞いても全くピンと来ず、ただただ自分の不甲斐なさに落ち込む毎日でした。６年前に退職すると決めた当時の私をここに連れてきて、「なんで辞めたの？　どうして頑張って続けなかったの？」と説教したい気持ちでいっぱいでした。

自分の力不足にへこみつつも、職場の環境にも恵まれ、１年半たった今は仕事にも先生と呼ばれることにも慣れ、一歩踏み出してよかったとしみじみ感じています。

復帰にあたって、自分自身の不安はもちろん、子どもたちが函館での生活と新しい学校に慣れてくれるかという心配も大きかったのですが、子どもたちは親が思っている以上にたくましく、元気に過ごしてくれたのが幸いでした。特に内地育ちの子どもたちにとって、函館の給食は量も多く、なによりとても美味しいのだそうです。昨日、仕事から家に帰って「学校はどうだった？」と聞いた第一声は「今日は給食のおかわりじゃんけんに勝ってホタテフライ３つ食べた！　美味しかった！」でした。

半沢ロス

札幌医科大学医師会
札幌医科大学皮膚科
塩野谷愛香

日曜日の夜がさみしくなってから久しい。先日、ドラマ『半沢直樹』が最終回を迎えた。

我が家も世間の例にもれず、日曜日の夜は家族で半沢直樹を見ていた。夫は片手にビールを、長男は片手にミロを持ちながら鑑賞するのが常であった。

小学校１年生が「債権放棄」という言葉を理解しているかどうかは甚だ疑問であったが、彼なりに勧善懲悪のストーリーが爽快であったようだ。別の日に正月のことを話していたら、「福袋の『ふく』って、副頭取の『ふく』？」と尋ねてくるほど半沢ファンになっていた。

４歳の次男は大和田取締役の顔芸が心の琴線に触れたらしく、事あるごとに「死んでもいやだね」を繰り返して周囲をいらだたせていた。

私はストーリーを楽しむ反面、半沢の妻である半沢花の良妻ぶりを見ては我が身を顧みることがしばしばであった。さりげなく写される料理の品数の多さに、若干気まずい思いをしていた。シーズン１の話になるが、花が半沢の故郷へ行き、義母に話を聞いてくる場面があり、その日の食卓シーンに出てくる味噌汁だけ白味噌であった（と、半沢マニアのTBS安住アナウンサーが言っていた)。製作スタッフが細かなところまで配慮していたのがうかがえる話だと思った。

花を見ていると、いつも笑顔でいるだけで家族が前向きになれるということを改めて思い知らされた。半沢が退職の覚悟を決めたときに発した「生きていれば、なんとかなる！」というセリフはシンプルながら力があると感じた。今後の人生で「辛い、もうだめだ」と思うことがあっても、「生きてさえいれば」と思うと、カウント８で起き上がれる気がする。

ふと見ると、三男がよちよち歩きながら寝室へ入っていった。日頃自分にちょっかいを出す次男が眠っていることをしっかり確認すると、つぎの瞬間、おもちゃで殴打し始めた。「倍返し」を果たした彼の顔は、心なしか晴れやかだった。